

異文化間接触研究におけるカルチャーショックの視点と緩衝機能

—Furnham, A. F. & Bochner, S. (1986) *Culture Shock : Psychological reactions to unfamiliar environments* をめぐって—

細越 久美子*

1. はじめに

「カルチャー・ショック」という言葉は、留学や海外旅行などでの異文化体験に限らず、日常用語として用いられている。学術用語としての「カルチャー・ショック」は、Oberg, K. が1950年代に紹介したのが最初といわれており、その後異文化間接触研究の中で重要な概念として使われてきた。しかし、その概念の普及に比してこの用語が体系的に整理されているとは言い難い。ここで取り上げる Furnham, A. F. & Bochner, S. の *Culture Shock : Psychological reactions to unfamiliar environments* (1986, Routledge) は、異文化間接触に関連する諸研究を「カルチャー・ショック」の観点から整理した包括的な書の一つといえる。本報告では本書の主要部分を要約・概説すると共に、現代の異文化間接触研究への示唆について考察する。その際、筆者が留学生の異文化適応を素材として整理してきた、異文化間接触における「緩衝機能 (buffering function)」(細越, 1996a, b, 1997) と本書の「カルチャー・ショック」の視点との関連についても論及する。

本書の第一部では留学、移民、国際協力、国際ビジネス、観光などの異文化間接触を総括的に論じ、その形態を滞在期間、目的、異文化への関わり方等の諸次元で分類している。第二部ではこうした様々な人の精神的健康や心理学的特徴について詳説している。第三部は、本書の中心である「カルチャー・ショック」について論じており、そこでは不慣れた環境の中でどう対処するか、(つまり Furnham らの見方では) 自分を取り巻く関係をどのように説明するか、が取り扱われている。さらに「カルチャー・ショック」についての伝統的な説明(「カルチャー・ショック」は運命的なものであり、それを避けるには移住者の選別などが必要であるといった考え)から、最近の説明(その人を取り巻く様々な関係性の変化という観点)に至る研究が紹介されている。そして第四部としては、カルチャー・ショックへの対処方略、特にソーシャル・スキルや文化学習の方法が展開されている。さらに異文化環境におけるソーシャル・サポートの重要性についても指摘している。

2. 著者について

Furnham はロンドン大学の教授であり、現在最も精力的な研究活動を続けている英国の社会心理学者である。そのアプローチの仕方はアメリカを中心とした実験社会心理学では

* School of Social and Behavioral Sciences, Swinburne University of Technology

なく、現実生活の諸問題を素材として研究するフィールドワークを中心とした社会心理学であり、本書もその一環といえる。尚、Furnhamの関心分野は多岐に渡り、邦訳されているものに『しろうと理論—日常性の社会心理学—』（細江達郎監訳 1992, 北大路書房；A. F. Furnham *Lay Theories : Everyday Understanding of Problems in the Social Sciences* 1988, Pergamon Press）がある。また、最近の書としては、心理学に対する期待や誤解を興味深く総括した *All in the Mind : The Essence of Psychology* (Furnham, A., 1996, Whurr Publishers) がある。尚、本 "Culture Shock" の邦訳・出版に関しては一部研究者が取りかかっているということを本人より伺っているが、まだ未公開のようである。また、ニューサウスウェールズ大学の Bochner は Argyle, M. 監修の *International Series in Experimental Social Psychology* の第1巻として著された *Culture in Contact : Cross-cultural interaction* (1982, Pergamon Press) の編者である。Bochner はその中で異文化間接触を同一社会内と異なる社会間とに分け、さらに9つの次元でその特徴を整理しているが、これはその後の関連研究にもよく使用されている。本書はこの意欲的な二人の実践的社会心理学者によって著されたものである。

3. 「カルチャー・ショック」：Oberg, K. の視点と適応段階

前述したように、Oberg, K. (1958, 1960) は「カルチャー・ショック」という用語を学術用語として紹介した文化人類学者である。彼は、ブラジルで布教活動をするアメリカ人宣教師たちが受ける様々なショックに注目した。それはあたかも一つの病理のように症状を持ち、原因を持ち、治癒がなされるものであり、慣れ親しんだサインやシンボルを失ったことから生ずる不安によって陥ることから、これを「カルチャー・ショック」とよんだ。さらに Oberg は適応段階をたどる一定の過程を提案した。それは、最初はハネムーンの段階があり、次に敵意と攻撃の段階、回復の段階、そして最後にはホスト国の文化を受け入れる適応の段階となる過程である。

この Oberg の提起した「カルチャー・ショック」の定義と適応の段階的な過程は、その後の異文化間接触研究を発展させると共に批判の対象ともなった。本書の序文で Lonner, W. J. は、自分の異文化体験を踏まえ、Oberg の適応段階説が全ての異文化間接触にいいのかという疑問を投げかけているが、これはその後の多くの研究の共通の認識でもある。

4. 本書の論点

(1) 「カルチャー・ショック」をどう捉えるか：肯定的影響と否定的影響

不慣れな文化にさらされることはストレスが多いということから、異文化環境での生活はたやすいことではないと言われてきた。しかし、異文化に接することは有害なことばかりでなく、肯定的な側面も多く持っている。「カルチャー・ショック」という場合、肯定的な出来事よりも、否定的な出来事の方に重点が置かれる傾向がある。しかし、本書はその強調点を変えて、どのようにして肯定的な効果を増加させ、否定的な効果を減少させるかという建設的なアプローチで取り組んでいる。つまり、文化を越えて移動するということは確かにストレスに満ちたものであるが、それは全ての場合に共通であるわけではない。

どんなストレスが問題となるのか、不慣れな環境に対する人々の反応に何故違いがあるのか、ということをはっきりさせる必要があるのである。

(2) 文化を越えて移動する人を比較する共通な視点：二つの文化の格差

本書では留学生、移民、ビジネスマン、旅行者、ボランティア活動者といった様々な人に共通な整理のモデルを考えている。それらは滞在の動機、滞在期間、職業、地位、受け入れ国への関与の程度などで整理することができる。これらの違いは全て、人が新しい環境にうまく対処できるかどうかに関わってくる。結局は、両文化の違いの程度がストレスとその対処の重要な規定因となってくる。しかし、この文化の違いをどう規定するか、文化のどの領域の違いが重要なのか、といったことが残された課題となる。

(3) 不慣れな環境への反応の多様性

Oberg が紹介した「カルチャー・ショック」は、何がそのショックを規定するかということに関する手がかりがほとんどないということと、「ショック」という語感から異文化間接触で滞在者が経験するショックの実際の差異を覆い隠すという問題が指摘されている。また、新しい文化への適応・対処はU字型の一連の段階に従う連続的な過程であるという適応の「Uカーブ仮説」は様々な文献で検証されてきているが、このUカーブを定式化してしまうことは、文化を越えた移動の形態の違いなどによって適応様式が異なるということを見失ってしまうおそれがある。

(4) 「カルチャー・ショック」の規定因：人の内部か外部か 「カルチャー・ショック」の規定因についての一般理論に到達するためにはいくつかの概念的問題がある。それは異文化間接触研究の領域に特有のものではなく、心理学全体に行き渡っている問題でもある。つまり行動の源を人の内部におくか外側におくかという問題である。同様に「カルチャー・ショック」についても、その原因がその人のパーソナリティ特性にあるとするものと、外からの影響にあるとするものの、二つの説明がある。それぞれの原因の説明はまた対処方法においても異なる。

多くの研究者はこれらの二つのアプローチを組み合わせようと試みてきた。しかし歴史的に見ると、初期の研究者は社会心理学者よりもパーソナリティ心理学者が主流であったため、「カルチャー・ショック」は恐怖や不安といった内的反応として捉えられ、精神病理や生まれつきの素質といったものが強調された。後に人々が不慣れな環境にどのように反応するかは、その人のその時点で出逢う経験にかなり依存しているということが認識されてきた。このことから、個人内の変数よりも個人間の変数が重視され、新しい理論モデルが必要とされてきた。以下がそれらの主なモデルである。

(5) 文化学習 / ソーシャル・スキル・モデル

このモデルによれば、「カルチャー・ショック」は新しい社会的慣習に不慣れであるときに起こる、あるいは慣れていたとしてもその規則に従って行動を行うことができなかつたり進んでしないようなときに起こる、とされている。この考え方は次のような特徴を持つ。①異文化への対処の困難は、滞在者の性格上の欠陥よりも適切なスキルの欠如に起因する。②滞在者は新しい文化に「適応」することよりも、実用的理由からその文化の必要な側面を学習する。そしてそれは、その人の永続的な行動レパートリーとなる必要はなく、機能を果たさないときには捨て去ることができる。③そこでの目的は第二の文化的スキルを教えることにある。④文化的 S S T (ソーシャル・スキル・トレーニング) はカウンセ

リングなどの治療的アプローチよりも容易であり、より経済的で効果的である。⑤SSTは特にバイカルチュラルな能力を持とうとする人々を訓練するのに用いることができる。従って、社会がますます多文化的になるにつれて一層必要となる。

(6) ソーシャル・サポート・システムの意義

文化を越えて移動する人のほとんどは、不慣れな環境に対処するための体系的な訓練を受けていない。しかし、第二の文化的スキルの獲得に関して他の人よりもうまくいっている人もいる。このことは、意図的でないとしても文化学習に貢献する少なくとも次の二つのことが考えられた。その第一は、非公式なチューターとして役に立つ「文化的友だち(culture friend)」の有用性である。このことはスキルを「訓練する」役割によるか、その人たちが提供する社会的、情緒的サポートによるか、あるいは二つの要因の組み合わせによるものかは様々である。実際のメカニズムがどのようなものであれ、こうした「文化的友だち」の有無が、不慣れな環境への対処に大きな差異をもたらすことは疑いはない。

第二は、滞在者が傍観者あるいは局外者として排除されるのではなく、その社会に参加するような形で関わることである。文化的スキルを獲得する過程にある時、受け入れ国のメンバーによって「支援されて」いるならば、その社会への参加者となることは促進される。参加するようになると、その人は第二の文化的スキルを効果的に学習し練習する位置につくことになる。その結果、参加が一層容易になるという望ましい展開となる。

このような好都合な展開をしている人でさえ、その受け入れ国の社会の中で排除されることがある。それは新しく入ってくる人の人種、宗教、あるいはその他の目に見える属性が、受け入れられないものと見なされるからである。このことについては次項で述べる。

(7) 文化的に異なる集団間関係の改善

本書の基本テーマは、文化的に異なった人々の接触が集団間の敵意や偏見を減少し、結果的に世界平和に貢献するだろうという想定であった。異なる集団が接触するだけでこうしたことが改善されるという仮説(単純接触仮説)は経験的にも理論的にも支持されていない。ある条件下では単なる接触は敵意と葛藤を増加させることにもなるのである。

社会心理学における様々な理論(類似性魅力仮説、バランス理論など)は、人は異なった人よりも同じような人を好むということを示している。しかし、異文化間接触は常に、様々な意味で異なる人々の出会いをもたらす。異なる人との接触が同じ人との接触と同様に肯定的な体験をもたらすということ、また異質な文化を担った人から受ける沢山の好意が存在しているということは、こうした伝統的な理論の期待とは矛盾している。多文化社会への方向が必然的な流れである限り、今後開発されていく新しいモデル、アイデア、技術がこうしたグループ間関係の改善に資するであろうということが、本書の信念である。

5. 異文化間接触研究の展開と今後の期待

異文化間接触研究の展開は本書でも紹介されているところであるが、多様な分野で発展し、文化を越えて移動するあらゆる事象が対象とされている。本報告ではそれらの中でも特に様々な次元(滞在期間、受け入れ国への関与の程度など)で中間的な位置にある留学生に関する研究について述べる。

留学生の異文化間接触研究といっても留学生個人の不適応といったミクロなレベルから、

留学生の国家間の移動や政策といったマクロなレベルまでであるが、ここでは留学生の異文化間接触によって生じる諸問題の対処に関する研究についてみていく。このような研究は大きく4つに分類することができる。第一に、異文化に適応する人のパーソナリティに関する研究、第二に異文化への対処能力やスキルに関する研究、第三に異文化環境での対人関係、特にソーシャル・サポートやソーシャル・ネットワークに関する研究、第四に留学生の受け入れ側のあり方に関する研究、がある。

Furnhamらやその他の関連研究者（星野, 1980; 近藤, 1981）が指摘したように、かつては、異文化環境において、どのようなパーソナリティを持つ人物が成功するのか、といった研究が多くなされてきた。そこでは、パーソナリティの違いが、異文化にうまく対処できるか否かを決定づけるということが想定されていた。

しかし現在では、特定のパーソナリティ特性が異文化不適応を起こすという考えは批判されてきており、内的特性というよりは対処能力 (competence) の欠如によるという見方が重視されるようになってきている。それに伴い、このような対処能力やスキル及びその訓練法に関する研究が発展してきている（山岸・井下・渡辺, 1992; 田中・藤原, 1992）。

また近年、異文化間接触心理学の分野でも対人関係を重視する研究が目立ってきている。異文化環境に適応しているかどうかということは、結局は異文化環境での対人関係がうまくいっているかどうかに関わっているという認識から、こうした分野の研究が重要視されてきたのである。その中でも特に、ソーシャル・サポートに関する研究が多くなってきている（周, 1993; 高井, 1994）が、これは心理学・社会心理学の研究領域一般でも「ソーシャル・サポート」という視点が注目されてきていることが背景にある。

さらに、受け入れ側のあり方に関する研究も重要である。在日留学生の受け入れのあり方については、入学者選抜方法の複雑さ・困難さ、取りにくい文科系博士学位（馬越, 1991）、オリエンテーションのあり方（大橋, 1991）などがあり、他に留学生受け入れの政策的な理念や問題について（江淵, 1991; 栖原, 1996）の研究がある。また、受け入れ側がもつ留学生への一般的な態度に関する研究（箕浦, 1992）もある。しかしながら、受け入れ側のあり方が重視されているのに比して、その研究は必ずしも十分ではない。

このような研究の展開の中で近年注目されているのは前述のようにソーシャル・スキル、ソーシャル・サポートであるが、Furnhamらが本書で指摘してきた視点はこの研究の動向と対応している。しかし、Furnhamらのいう文化的に異なる集団間の関係の改善という分野は本来移民などを想定したものであり、留学生の異文化間接触研究ではほとんど見受けられない。留学生が量的に増加し、場合によっては特定の国からの留学生が極端に多くなることにより、ソーシャル・サポートが同国人のみによってなされ、受け入れ側との接触が十分でないという現象が、筆者の実証研究でもあらわれている。留学生の異文化間接触研究においてはどのような集団（monocultural, bicultural, multicultural network）からのサポートが効果的であるか、ということに関する詳細な研究が必要とされよう。

6. 本書の「カルチャー・ショック」の視点と「緩衝機能」

筆者は留学生の異文化間接触において、異なる文化と文化をどのように調節・媒介し、落差を和らげているのかということに焦点を当て、そのような働きを包括的に「緩衝機能

(buffering function)」と考え研究を進めてきた(細越, 1996a,b, 1997)。そしてこの緩衝機能を果たすと考えられるものには留学生側の持つ様々な心的準備状態や語学力、ソーシャル・スキルといったもの、受け入れ側の留学生に対する態度や受け入れ制度といったもの、そして留学生側と受け入れ側の中間に位置し両者をつなぐようなチューター制度や国際交流イベントなどがある。留学生の異文化間接触過程についての詳細な事例研究から、以下の10の緩衝機能を見出すことができた。

差異に関わり調整する働き

- ①差異を軽減させる働き(例: 語学力、ソーシャル・スキル等)
- ②差異を許容する働き(例: 個人のもつ柔軟さ、許容度等)
- ③異文化間接触を志向する働き(例: 動機づけ、積極性等)

両文化に介在してつなぐ働き

- ⑦相互接触を促進する働き(例: 国際交流イベント等)
- ⑧仲介・媒介する働き(例: 通訳、英語などの共通言語等)

①②③を背後で支え高める働き

- ④隔たり感を狭める働き(例: 日本人の知人との交流等)
- ⑤個人の動機づけを高める働き(例: 周囲の人からの勧め等)
- ⑥個人の対処能力を高める働き(例: 日本語学校での教育等)

上記①～⑧の機能全体の背景となっている働き

- ⑨保護的な働き(例: 同国人学友会や宗教上の集會等)
- ⑩基本的生活を支える働き(例: 奨学金制度、留学生用宿舎等)

Furnham らが指摘しているように、「カルチャー・ショック」は基本的には接触する二つの文化の格差によって生じる。そして「カルチャー・ショック」への対処としては、何らかの形でその格差を少なくし、埋めることが求められることになる。筆者の「緩衝機能」に関する研究は、Furnham らがその対処としてとられるべき諸施策をそれらが果たそうとする機能の観点から整理したものである。

しかし、実際には緩衝機能は留学生の「時間的経過」「生活領域」「対人ネットワーク・パターン」の違いに対応して適切になされなければならない。その意味で、筆者の研究は Furnham が示した方向に沿った具体的な施策の提供に寄与するものと考えている。

最後に、特に「対人ネットワーク・パターン」について触れる。例えば、留学生は異質社会に入るために適応過程の初期においては monocultural network に依存する傾向がある。それによって確かにいくつかの緩衝機能が果たされる。しかしそれが過剰になると、異文化間接触が阻害されてくる。また、monocultural network に固執する留学生を受け入れ側もステレオタイプ化し異質なものとして取り扱ってしまうことになる。こうした傾向は、留学生の増加に伴い益々著しくなる可能性がある。いずれにしろ本書は、こうした異国間、異文化間の問題への展望を含めて示唆的な書といえる。特に Furnham の主張する集団間関係の改善の方向は、留学生の異文化間接触においても学ぶべきものがある。

我々は、ともすれば同質なものに安住する。しかし異質なものと出会うことにより感動し、創造的な発展があることを理解することは、多文化社会にとって必然的な方向である。本書はこうした異文化間接触の肯定的な展望を強調した点からも興味深い。

文 献

Bochner, S.1982 The social psychology of cross-cultural relations. In S. Bochner (ed.), *Culture in Contact : Studies in cross-cultural interaction*. Pergamon Press.5-44.

Bochner, S.,McLeod,B.& Lin,A.1977 Friendship pattern of overseas students: a functional model. *International*

Journal of Psychology,12,227-294

- 江淵一公 1991 留学生受け入れの政策と理念に関する一考察—主要国における政策動向の比較分析から—。広島大学大学教育センター『大学論集』第20集,35-65
- Furhnham, A. & Bochner, S. 1986 *Culture Shock : Psychological reactions to unfamiliar environments*. Routledge.
- Furhnham, A. 1988 *Lay Theories : Everyday Understanding of Problems in the Social Sciences*. Pergamon Press (細江達郎監訳 1992 『しろうと理論—日常性の社会心理学—』北大路書房)
- Furhnham, A. 1996 *All in the Mind : The Essence of Psychology*. Whurr Publishers.
- 星野命 1980 概説・カルチャー・ショック。『現代のエスプリ 161 : カルチャー・ショック』至文堂, 5-30.
- 細越久美子 1996a 留学生の適応過程：「緩衝 (buffering)」の視点から。東北心理学研究, 第46号,
- 細越久美子 1996b 留学生の適応過程：「緩衝 (buffering)」の視点から (2)。日本社会心理学会第27回大会発表論文集, 192-193.
- 細越久美子 1997 留学生の異文化間接触：「緩衝機能」の視点からの検討。岩手大学大学院人文社会科学部研究科修士論文。
- 近藤裕 1981 カルチュアショックの心理：異文化とつきあうために。創元社。
- 馬越徹 1991 異文化接触と異文化教育。『異文化間教育5』21-34.
- 箕浦康子 1992 日本人学生と留学生：予備調査—岡山大学における異文化接触の実態とその促進要因—。岡山大学文学部紀要, 第18号, 69-85.
- Oberg, K. 1958 *Cultural Shock and the problem of adjustment to a new cultural environment*. Department of States.
- Oberg, K. 1960 *Culture Shock : Adjustment to new cultural environment*. *Practical Anthropology*. July-August, 177-182.
- 大橋敏子 1991 留学生オリエンテーションの課題—二つの実態調査から。『異文化間教育5』アカデミア出版会, 49-65.
- 栖原暁 1996 アジア人留学生の壁。NHK ブックス。
- 周玉慧 1993 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度の試み。社会心理学研究, 第8巻, 第3号, 235-245.
- 高井次郎 1994 日本人との交流と在日留学生の異文化適応。『異文化間教育8』アカデミア出版会, 106-116.
- 田中共子・藤原武弘 1992 在日留学生の対人行動上の困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討。社会心理学研究, 第7巻第2号, 92-101.
- 山岸みどり・井下理・渡辺文夫 1992 「異文化間能力」測定の試み。『現代のエスプリ 299 : 国際化と異文化教育』至文堂, 201-214.
- 横田雅弘 1992 在日留学生への異文化オリエンテーション・プログラム。『現代のエスプリ 299 : 国際化と異文化教育』至文堂, 109-117